

豊庄だより



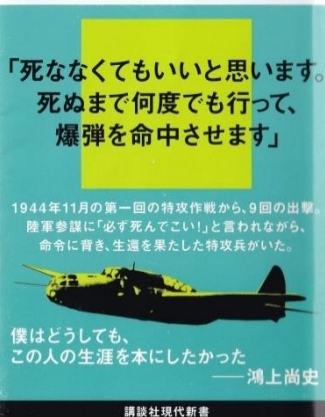
第 530 号 2018 年 8 月 27 日

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

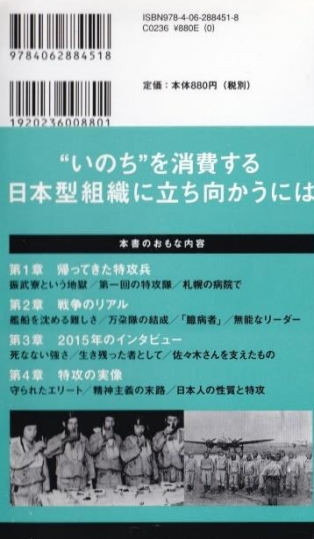
この夏、特攻について考えさせられる本に 2 冊出会いました。1 冊目は鴻上尚史さんの『不死身の特攻兵～軍神はなぜ上官に反抗したか～』（講談社現代新書）です。1944 年 11 月の第 1 回の特攻作戦から、9 回

不死身の特攻兵

軍神はなぜ上官に反抗したか
鴻上尚史



不死身の特攻兵
鴻上尚史



の出撃。陸軍参謀に「必ず死んで来い」と言われても、命令に背き、生還を果たした特攻兵の話です。その人の名は佐々木友次さん。著者の鴻上さんは札幌の病院に入院している佐々木さんのもとを訪ね、5 回の聞き取りをします。かなりの高齢にもかかわらず、インタビューに答えて下さり、この本ができました。本には、佐々木さんが何と戦い、何に苦しみ、何を拒否し、何を選んだか、そして、どうやって生き延びたか、生き延びて何を思ったかが書かれています。佐々木さんは北海道の開拓農家の子として生まれ、幼いころから空を飛ぶことにあこがれ、飛行機乗りを目指しました。厳しい訓練に耐え、優れた操縦技術を取得しますが、戦争は末期。十分な飛行機がない中、軍の指導部が打ち出したのが特攻でした。しかし、佐々木さんの上官は特攻作戦に疑問を持ち、「跳飛爆撃」という方法の有効性を主張し、部下たちにその訓練をさせた人でした。しかし、この方法は採用されず、精神主義の特攻という体当たり作戦が軍の主要な攻撃方法になった

のです。さらにその特攻の第 1 号に上官は選ばれます。このあとは本を読んでください。

2 冊目は『空に飛ぶ』（講談社）です。著者は鴻上尚史さん。『不死身の特攻兵』と同じ作家です。『空に飛ぶ』は、いじめにあり、人生に絶望した埼玉県に住む少年（中学生）が、夏休みに札幌の病院で働く叔母のところを訪ねた時、偶然病室の老人（佐々木さん）が元特攻隊員だったことを知ります。興味を持った少年は、何度となく札幌へ行き、病室を訪ね、話を聞き、そこから自分の生きていく道を探していくというストーリーです。少年の中学校での生活と佐々木さんから聞いた話が語られる内容が、交互に出てきます。佐々木さんの登場する所は、『不死身の特攻兵』で書かれていることと重複していますが、少年が教室でいじめにあう姿があまりに非情で、これ以上読み進むのは嫌だと思うことが何度となく起こりました。しかし、辛いけど何とか読み進んでいくうちにいつしかこの少年と同じ気持ちに近づいていったような気がします。少年は、佐々木さんが上官の理不尽で非情な命令を受けながらそれに負けずに、空を飛び続けることがなぜできたのかを懸命になって追いかけてきました。この物語は、すべてが解決して、ハッピーエンドとはなりません。したがって読後感はさわやかというわけにはいきませんが、苦悩しながら、傷つきながら、自分の弱さも知りながら行動する少年の姿は、大変印象に残りました。



学校の平和授業（特に低学年）で、「教室の中でいじめのないクラスにしていきましょう」と、戦争の問題をいじめの問題と結びつける実践に多く出会います。そのたびに両者と同じレベルの問題として考えるのはおかしい、安直すぎると思っていました。しかし、今回、2 冊の本に出会い、佐々木さんの生きざまと少年の苦悩は同列とまでは言えませんが、構造は極めて似ていると思いました。